

—明日の日の 布勢の浦廻の 藤波に  
けだし来鳴かず 散らしてむかも—

「作業センターふじなみ」の事業所名の由来となったこの万葉歌にある「藤波」とは、「藤の花房が風になびくさまを波に見立てた」言葉です。

氷見市下田子に鎮座する田子浦藤波神社境内では、藤のつるが幾重にも絡み合い、まるで巨龍がうねっているかのようです。

めひの野



〒930-0143  
富山県富山市西金屋6682番地  
社会福祉法人めひの野園  
TEL.076-436-0270  
発行責任者 中田 匡  
(表題書)  
高岡市中川上町3の31  
(故) 社浦 秋水先生

特集

めひの野園のルーツをめぐる  
めひの万葉歌紀行

多機能型(就労継続支援B型・就労移行支援)事業所  
作業センターふじなみ

秋の陽光が差し込む田子浦藤波神社 写真:岡崎 秀徳 (めひの野園写真部)

めひの野園  
の  
ルーツをめぐる

# めひの万葉歌紀行

## 第6回

明日の日の  
布勢の浦廻の

藤波に  
けだし来鳴かず

散らしてむかも  
(大伴 家持)

——明日はひよっとすると布勢の浦辺の藤の花  
には(ホトトギスが)来て鳴くことはなく、  
むなしく散ってしまうのではなからうか。

### 大伴家持と「布勢の浦廻」

「浦廻(うらみ)」とは、海岸が曲がって入り組んだ入江のことで、大伴家持は越中国守としてこの地で過ごす間、「布勢の浦廻」での遊覧をことのほか気に入り、何度も歌に詠んでいます。  
奈良の都では舟遊びの機会も無かったことでしょう。布勢の水海を詠んだ長歌では、「ここはくも 見のさやけき(これほどに素晴らしい眺めが他にあるだろうか)」と絶賛しているほどです。

### 「布勢の水海」はいつこに?

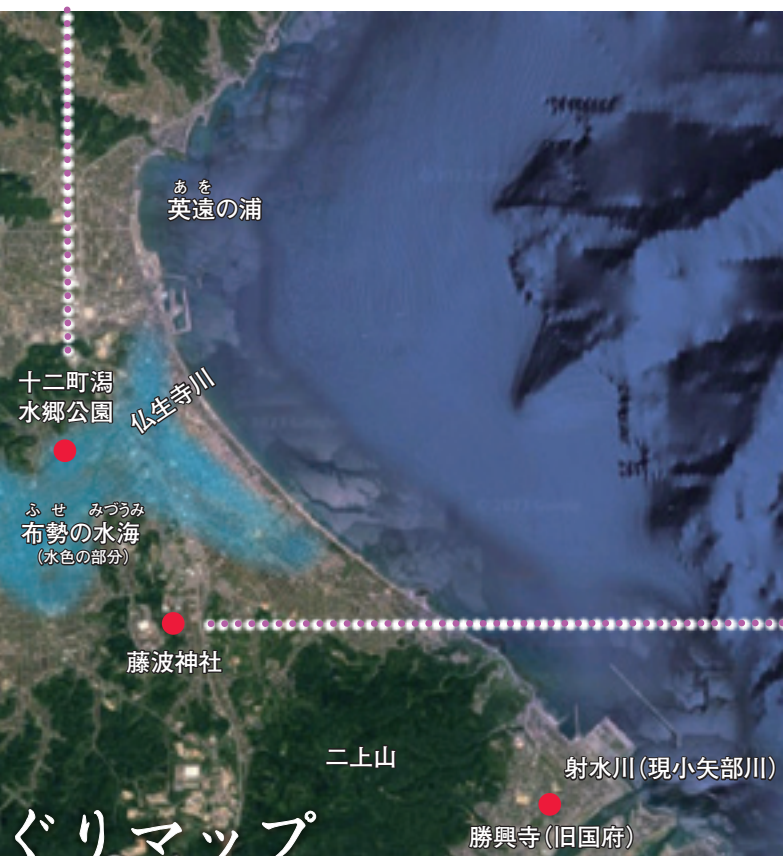
現在の氷見市十二町潟一帯には、今からおよそ1250年前の奈良時代、潟湖(せきこ:湾口に発達した砂州により外海と離されて生じた湖)が広がっていました(下の図の水色の部分)。当時、この潟湖は「布勢の水海」と呼ばれ、風光明媚な景勝地として家持をはじめとした万葉歌人たちが好んで舟遊びに訪れました。  
その後、江戸時代に干拓が進み、現在では「十二町潟水郷公園」にある細長い水路に往年の面影を偲ばせるのみになりました。



さざめく様を



「布勢の水海」



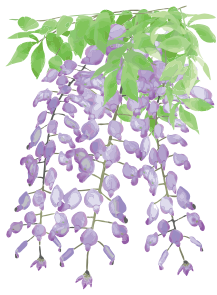
ぐりマップ



田子浦藤波神社の鳥居にかかる藤の大樹。

### 藤波神社の大藤

氷見市下田子に鎮座する「田子浦藤波神社」の創建は、平安時代初期の798年(延暦17年)。大伴家持から授かった太刀を、南兵衛尉信光が御神体として祀ったのが始まりと伝えられています。  
境内は古くから藤の群生地として親しまれてきました。鳥居の真上にかかっている藤の木は、推定樹齢200年、樹高28mという大樹で、現在も人々を見守っています。



748年(天平20年)、奈良の都から田辺福麻呂が使者として越中を訪れました。その歓迎の宴で、家持は「明日は越中の名所『布勢の水海』を案内しましょう」と誘いました。福麻呂は期待をふくらませ、

—藤波の 咲き行くみれば ほととぎす  
 鳴くべき時に 近づきにけり—

(藤の花が咲き広がるのを見ると、ホトトギスが鳴く頃が近づいているのですね)と歌に詠みました。家持の「明日の日の」の歌は、これに応えて詠んだもので、家持が「藤の花が散ってしまうのではなからうか」と詠んだのは、「そうなる前に布勢の水海を遊覧し、藤の花を觀賞しましょう」という家持の思いが込められているのではないのでしょうか。



咲き誇る藤の花。花房が波のように歌人は「藤波」と表現しました。

高い石段を登ると、山頂には布勢神社が鎮座し、その背後には全国で最初に大伴家持を祀った御影社が建っています。また、傍にある万葉歌碑は富山県内最古のものとされています。

氷見市布勢に、お碗を伏せたような形をした標高20mほどの丘陵があり、「布勢の円山」と呼ばれています。この辺りに広がっていた「布勢の水海」に浮かぶ小島か崎として、遊覧する歌人たちの目を楽しませました。

### 「布勢の円山」とは？



お碗を伏せたような丘陵「布勢の円山」



十二町瀧水郷公園内に残る現在の



地元スーパーに設けられた「めひの野園生椎茸」販売コーナー。

「作業センターふじなみ」は、「障がいがあっても一人ひとりが生き生きと働ける環境作り」を理念として2005年に開設され、菌床椎茸の一貫生産に取り組んできました。

今では地元スーパーに「めひの野園生椎茸」の販売コーナーが設けられるなど、「めひの野園」といえば椎茸の一貫生産」と言われるまでになりました。

### 「作業センターふじなみ」の理念と取り組み



「布勢の円山」の歌碑



布勢の円山

# めひの万葉め



開設当時の「作業センターふじなみ」。

椎茸栽培ハウスは温度管理が徹底され、天候に左右されることなく年間を通して椎茸が発生するため、常に安定した作業が利用者に提供されています。また、椎茸一貫生産には様々な作業工程があり、利用者はそれぞれの特性を存分に発揮して作業に取り組んでいます。

「藤波」という言葉はこれまで多くの歌人に好まれ、歌に詠まれてきました。「作業センターふじなみ」もまた、地域の皆さんに愛され、そして藤の大樹のように地域に広がっていく存在でありたいと願っています。

次号について「めひの万葉歌紀行」は、最終回を迎えます。

記・広報委員会 岡崎 秀徳



高じた趣味を仕事に活かす  
「めひのの職員」紹介します!



絵本セラピストになるきっかけになった絵本「花さき山」。

# あしたのめひの

## Vol.29

### 今、ここを生きる

#### 宮舟貴子

(めひの自閉症地域生活  
支援センター相談員)



**Q.** 先日、めひの野園の有志職員を対象に「絵本セラピー<sup>®</sup>」が行われましたが、それはどのようなものですか？

——絵本の力を借りて心が豊かになる時間です。テーマに沿った絵本の読み聞かせの後で、絵本から感じたことを参加した人たちとシェアしたり、簡単な問いかけに答えたりする。「参加型のプログラム」です。参加者は、自分の自然な気持ちを表現したり、大切なことへの気付きが生まれやすくなるなど、自然な交流を楽しむ場にもなっています。

**Q.** セラピーのテーマは「自閉症の人たちと向き合いがんばる私たちへ」でした。



セラピーで絵本を読む宮舟さん(写真上)。野菜作りはライフワークだそうです(写真左)。収穫した野菜を使った特製ピザ作り(写真右下)など、仲間たちとの時間をエンジョイしています。

——まずは利用者さんに寄り添う職員の皆さんを労うこと。そして、自閉症を題材にした絵本の読み聞かせによって、自閉症の人たちへの理解がより深まり、普段の支援に活かせたらと思います、このテーマにしました。

自閉症をテーマにした絵本を通して感じた「自閉症がある」や、日々の体験を語り合うことで、皆さんの心がほぐれたり、新たな気付きが得られたりする有意義な時間になったのではないのでしょうか。

参加された職員の皆さんからは、「優しい語りと可愛い絵で温かい気持ちになりました」、「自閉症について考える機会

になりました」といった嬉しい感想を頂きました。

**Q.** 「絵本セラピー<sup>®</sup>」の他にも様々な活動をされているそうですね？

——スクールソーシャルワーカーとして、不登校や障がい、貧困、虐待、ヤングケアラーといった、子どもたちが抱えている様々な問題に取り組んでいます。「めひの自閉症地域生活支援センター」で携わる相談業務と重なる部分もたくさんありますね。

そして、ライフワークである野菜作りや、仲間たちとの釣りやキャンプ、そこで皆と一緒に食事を作っていたり、本当に楽しく、美味しく、私にとっての心豊かな時間になっています。

**Q.** 今後の展望をお聞かせください。

——「絵本セラピスト<sup>®</sup>」の資格を取得し、自閉症・発達障害に携わる人や家族、自閉症を知らない人々への啓発活動として「絵本セラピー<sup>®</sup>」の場を提供したいです。

また、生きにくさを抱えた人たちが安心して過ごせる場として、「いまここカフェ」をめひの野園の事業所「やねのうえのガチヨウ」で、月に一回開催しています。楽しい企画で、そこに集う人たちが笑顔になれる場を作っていきたいですね。

「何とかなるさー」が宮舟さんの行動力の源なのだそうす。

記：広報委員会 柴田 香菜江



共生社会への思いを胸に、夏祭りがついに再開！

8月25日（金）、コロナ禍で開催を自粛していた「めひの野園夏祭り・花火大会」が再開されました。地域の皆さんとの交流の場として長年開催してきた夏祭り。今年はずいぶりの開催とあって、会場には多くの方が来場され、楽しくにぎやかな夏の夕べを過ごすことが出来ました。



地域の皆さんと和踊りを  
楽しみました。

会場のアトラクションは、めひの野園の和太鼓サークル「喜楽太鼓」の演奏に始まり、「マヒエホアラウナ」の皆さんのフラダンス、民謡歌手・長岡すみ子さんの歌声へと続き、集まった人を楽しませてくれました。

会場では、「スーパーヨーヨーすくい」に興じる子どもたちも多く見られ、また、歌声に合わせて利用者と地域の皆さんが一緒になって輪踊りを踊るなど、夏の暑さを忘れさせる楽しいひと時となりました。



民謡歌手・長岡すみ子さんの歌声が会場を魅了しました。



子どもコーナー「スーパーヨーヨーすくい」。かわいい笑顔が印象的でした。



アトラクションのオープニングを飾った「喜楽太鼓」の和太鼓演奏。



夏祭り再開までにはもどかしい思いもありましたが、こうしてお客様の笑顔や温かい言葉に触れ、夜空を彩る花火を地域の皆さんと見上げていると、「呉羽の夏の風物詩」が戻ってきたことを実感できました。

最後に、夏祭り・花火大会の開催に当たり、多くのご協力を賜り、本当にありがとうございました。



大勢のお客様で賑わった模擬店。「飛騨地鶏の串焼き」は大行列に。

**模擬店も大盛況！**

模擬店では、飛騨地鶏を使った串焼きや唐揚げ、飛騨地鶏カレーに朝採れ椎茸といった、めひの野園の看板メニューが勢ぞろい。どれも行列ができて完売するほどの人気でした。

# めひのキラリ!人

Vol.11



今回のキラリ!人

作業センターふじなみ

渡邊 健司さん

**野球にも仕事にも一生懸命!  
そのひたむきさが皆の心に響く!**

めひの野園では、「利用者さんの好きなこと、出来ること、得意なことを活かし、それを仕事につなげていく」ことをモットーに支援をしています。

自分の好きなことを続けるうちに向上心が芽生え、日々の仕事への意欲につながっていく…。今回はそんな「キラリ!」と光る利用者さんを紹介します!

めひの野園で、野球を愛してやまない職員たちが集う「めひの野園野球部」。その練習に欠かさず参加し、部員たちに少なからず影響を与えている利用者が渡邊さんです。

毎週火・木曜日の練習に積極的に参加している彼が野球を始めたきっかけは、「少しでも体を動かして健康的に過ごしてほしい」という保護者の希望からでした。



「キャッチボールもだいぶ様になってきましたよ」と中田監督。

た。そこで中田園長(兼野球部監督)の発案で、野球部の練習に参加するようになったのです。  
最初はキャッチボールもままならないレベルでしたが、練習を続けるうちにみるみる上達して行きました。

「渡邊さんが上手になっていく姿を見る」と自分の励みにもなります」と話すのは作業センターふじなみの久郷指導員。

「練習を続けて野球が上手になることに自信が付き、ふじなみでの普段の仕事にも積極的になりました」とのことです。もともとシャイな性格の渡邊さんですが、「色々な仕事をやってみたい」と意欲的に話し、椎茸の摘み取りや、パックセンターでの作業に植菌作業…と、様々な作業に挑戦するようになりました。



額に汗して椎茸を摘み取る渡邊さん。

そして今では、「作業センターふじなみのマルチプレイヤー」として活躍しています。野球同様に一生懸命に自分の仕事に打ち込む姿は、やはり事業所職員にとって良い刺激になっているようです。

そんな渡邊さん自身も、「練習で野球が上手になることや、仕事で自分が出来ることが増えていくことが嬉しい」そうです。

これからも持ち前のひたむきさで、みんなに良い影響を与えてくださいね!

「ボールを怖がらずに向かっている姿が良い」と、野球部員たちからも高評価の渡邊さんです。

記：広報委員会 岡崎 秀徳



# めひの野園 職員研修旅行記

—長野県「本物にふれる旅」—

コロナ禍が落ち着き、イベントや行事が再開される中、職員の研鑽を目的にこれまで行われてきた「めひの野園職員研修旅行」も再開し、9月17日(日)、18日(月・祝)の2日間、長野県へ行ってきました。今回の旅行のテーマは、中田園長の発案による「本物にふれる旅」。「本物」の作品を自分の目で間近に見ることで、参加した職員たちは日本の美術の真髄を体感しました。



豪商の館・田中本家博物館を見学。



長野県小布施の「北斎館」では、江戸時代の浮世絵師「葛飾北斎」の作品に魅了されました。

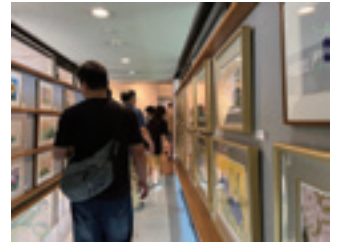
## 「本物」の美術作品に感動の2日間

旅行初日に訪れた「東山魁夷館」では、日本画の巨匠・東山魁夷の作品を鑑賞し、その筆致や、「東山ブルー」と呼ばれる透明感のある淡い色合いを堪能しました。

2日目に訪れたのは、葛飾北斎晩年の作である、岩松院の「八方睨み鳳凰図」。本堂内の21畳分の大きさの天井絵は、160年前に描かれたとは思えないほどの鮮やかさでした。

旅行中には「中島千波館」、「北斎館」も訪れました。展示された作品の前に立つと、その魅力や感動が心に深く響いてきました。

「本物」の美術作品の数々に触れ、職員のモチベーションも高まった有意義な研修旅行でした。



日本画家「中島千波」の作品を鑑賞。



藤井聡太7冠が名人戦を戦った「藤井荘」に宿泊出来たことにも感激!



情緒ある小布施の街並みを訪れ、写真撮影に熱が入る写真部のメンバー。

## 「日帰り登山のすすめ」



めひの野園職員の  
雑感コーナー



春の苑 リサイクル班

安井 慶祐

私の愛読書は「富山県の山」です。その本を片手に、休日は日帰り富山の里山をせっせと登っています。この趣味を始めて10年以上経ちますが、未だ本に載っている山を全踏破する意気込みはなく、好きな山や登り易い山ばかり何度も登る『楽ちん日帰り登山』が私のモットーです。

日帰り登山の良さはいくつもありますが、一つ目は、何と言っても「一日で味わえる達成感」だと思います。人生にはすぐに結果が得られないことも多いですが、日帰り登山であれば、その日のうちに無理なく山頂に到達できます。山頂に立った時の爽快感や、そこからの景色は格別で、いつも自分を見つめ直す良い機会となっています。

二つ目に、山には様々な出会いがあります。動物や昆虫、植物や澄んだ空気や水との出会い、また同じ山でも見せる表情や景色がいつも違います。立山では「本当に絶滅危惧種なのか」と思うほどの雷鳥の群れと出会いましたが、あの時の感動は今も忘れられません。

三つ目に、仲間と登る楽しみがあります。私の場合は夫婦登山なので、登山中はずっと二人で励まし合いながら、何気ない会話を楽しんでいます。これまで熊との遭遇を回避できたのも、熊鈴以上の会話の効力だと信じて疑いません。また、道迷い等で冷静な妻に何度助けられたか分かりません。いつも感謝です。

何とも登山の魅力が伝わらない文章となってしまうかもしれませんが、これからも様々な出会いと感動を求めて、趣味や仕事に邁進したいと思っています。

